

中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	教授
氏名	土橋 茂樹		
NAME	TSUCHIHASHI Shigeki		

1. 研究課題

（和文） 存在論の再検討—「実在（ウーシアー）の彼方」をめぐる解釈史の観点から—

（英文） Re-examination of Ontology : What does it mean to surpass being ?

2. 研究期間

2019・2020・2021 年度 ※2021 年度は新型コロナウイルス感染症特例対応により 1 年間延長

3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600 字程度、英文 50word 程度）

（和文）「存在論の再検討」と題された本研究においては、以下の二点が目的として設定された。第一に、プラトンやアリストテレスをはじめ古代ギリシアにおいて、従来、「ある」(εἶναι) の基本的な用法とみなされていた存在 (existential) 用法 (「～がある」用法) が、実は述定的 (predicative) 用法 (「～である」用法) から派生したものであったということを各種テキストから調査・確認すること。次いで第二に、アリストテレス以後、存在用法としての εἶναι が主題的に取り上げられるようになった時期を画定するために、ひとつの方策として、プラトン出自の「実在 (ウーシアー) の彼方」という概念のその後の解釈史をたどり、旧約聖書「出エジプト記」における神の名「ありてある者」と「実在の彼方」概念との整合的解釈に苦闘したギリシア教父において存在概念の変容が見出されるという仮説を検証すること、以上の二点である。研究機関中は、この二点を中心に考察がなされ、所期の目的はほぼ十分に達成することができた。

(英文) In this study which concerns the theory of the Greek verb *to be*, I explored the best ways to replace the conventional but misleading distinction between copula (i.e. the predicative use) and existential verb with a more adequate theoretical account from the viewpoint of the Greek church fathers.